ティーチング・ポートフォリオ（教育業績ファイル）

教員氏名	酒巻 和子

主な担当科目	西洋音楽史Ⅰ，西洋音楽史特殊講義，博士西洋音楽史特講Ⅰ，作曲家・作品研究，音楽評論概説，課題研究Ⅰ，課題研究Ⅱ，卒業研究，芸特応用研究Ⅰ，芸特応用研究Ⅱ
シラバス	次ページをご参照ください

2022年の教育目標・授業に臨む姿勢	担当する授業の教育目標をしっかり達成できるように心がけた。対面授業の良さを実感しながら、ICTの良さも取り入れるようにした。学部、短大、大学院それぞれの科目について、学生が学修成果の獲得を自ら確認できるように、授業の資料や教材を工夫した。また、自主的な学修の習慣が身に着くよう、これまで以上に意識して指導した。
2022年の教育に関する自己評価	Teamsの活用については、一定の効果があったと思われる。音楽と社会コースの新入生にとっては難しいこともあったが、サポートを継続し、学生の不安を取り除くように努めた。「卒業研究」には4人のシニアの学生がそれぞれ独自の研究テーマに取り組み、充実した成果発表することができた。大学院修士課程の必修科目「西洋音楽史特殊講義」では、授業内発表を資料提出の形で取り入れ、学生個々の研究力の向上をめざした。修士研究、修士論文いずれも、充実した成果をあげることができた。

2022年のFD活動に関する自己評価	研究科FD副委員長として、打ち合わせ段階から全体研修会の内容やFD年間テーマについて検討会・打ち合わせに参加した。特に、2022年3月に実施した臨時のFD全体研修会は、多様な学生に関する取り組みとして有効な前例となった。9月の全体研修会では久しぶりに実現した対面での学内組織ごとのFD研修会が充実するようにファシリテーターとしての役割を果たした。所属の学内組織研修会にも出席して、教員のさまざまな取り組みを共有した。
授業改善のために取り入れた研修内容	Teamsを活用した資料の掲示や課題等を継続した。学生のICTスキルや通信環境がさまざまなことから、連絡事項については確実に伝わることを重視し、課題等の提出はオンラインでも対面でもよいことにした。多様な背景をもつ学生への対応についても、教員間での共有も適切に行いながら、客観的に判断できるよう努めている。

科目名－クラス名

西洋音楽史Ⅰ　A

曜日時限

金 3時限

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	70	30	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋芸術音楽の歴史について学びます。本学には多彩な音楽史系科目がありますが、なかでも音楽史の学びの第１段階として、この「西洋音楽史Ⅰ」の授業の最も重要な目的は、①音楽の歴史の大きな流れ、そして本質的な流れを捉えること。②各時代の様式（音楽的な特徴）のイメージを捉えること。そして③さまざまな様式の音楽に触れることで、音楽人に欠かせない「音楽的な経験」そのものを豊かにすることです。各時代を代表する作曲家や作品について、目（楽譜）と耳（音）と頭（知識）によって理解することを目指します。
クラシック系の楽器や声

学修成果

「西洋音楽史」は、これから皆さんが音楽を専門的に学んでいくために必要となる知識を扱う科目です。歴史の流れだけでなく、そこで登場するさまざまな音楽の種類やジャンルについて、また音楽の基本的な形式や楽器についての知識も学びます。これは、将来皆さんが活躍する舞台となる演奏の現場や、音楽ビジネス、音楽教育の現場で必須の知識です。
そのほかにも、授業外学修で多くの音楽を聴いたり、レポートを書いたりすることで、音楽の世界で役に立つさまざまな基本知識やルール、「資料を集め、読み込む力」（文献リテラシー）、「情報を精査

授業展開と内容

第1回　導入：「西洋音楽史」とは何か？
―「西洋」とは、「音楽」とは、「歴史」とは何かに目を向けよう！

第2回　中世①：グレゴリオ聖歌とオルガヌム
―中世の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第3回　中世②：宮廷歌人の世界

第4回　中世③：中世の記譜法／アルス・ノヴァとトレチェント

第5回　ルネサンス①：中世からルネサンスへ―神のための音楽から、人間のための音楽へ
―ルネサンスの音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第6回　ルネサンス②：通模倣様式とその発展

第7回　ルネサンス③：宗教改革と反宗教改革の音楽

第8回　ルネサンス④：目で見る音楽―ルネサンスの詩と音楽、色鮮やかな世俗音楽の世界

第9回　バロック①：ルネサンスからバロックへ　―モノディ歌曲とオペラの誕生
―バロックの音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第10回　バロック②：オペラの発展とナポリ派オペラ

第11回　バロック③：カンタータとオラトリオ

第12回　バロック④：ソナタと組曲　―「言葉のないドラマ」としての器楽の歴史へ

第13回　バロック⑤：協奏曲

第14回　バロック⑥：フーガ

第15回　まとめ：西洋音楽とその歴史の特質　―「音によるドラマ」としての声楽の発展と器楽の台頭

第16回　導入：バロックから古典派へ

第17回　古典派①：「言葉のないドラマ」としての器楽と「ソナタ形式」
―古典派の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第18回　古典派②：ハイドン　―弦楽四重奏曲を中心に

第19回　古典派③：モーツァルト　―ピアノ・ソナタと交響曲を中心に

第20回　古典派④：ベートーヴェン　―交響曲を中心に

第21回　古典派⑤：古典派の歌曲とオペラ　―グルック、モーツァルト、ベートーヴェン

第22回　ロマン派①：古典派からロマン派へ　―拡大するオーケストラと交響曲
―ロマン派の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第23回　ロマン派②：「描く音楽」としての交響詩、民族主義と国民楽派

第24回　ロマン派③：ピアノとピアノ音楽

第25回　ロマン派④：声と楽器の織り成すドラマ　―オペラ

第26回　ロマン派⑤：声と楽器の織り成すドラマ　―歌曲

第27回　近・現代①：ロマン派から近・現代へ　―印象主義と表現主義
―近・現代の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第28回　近・現代②：十二音技法と新古典主義

第29回　近・現代③：ノイズと偶然性の音楽、電子音楽の登場、そして…

第30回　まとめ：ふたたび西洋音楽史の流れを振り返ると、私たちの未来には何が見えるか
―西洋音楽史での学びを、自分自身の演奏や、音楽の聴き方、音楽とのかかわり方に、どのように生かせるかを考えよう

履修上の注意

①コース、学年によってクラス指定がある。ポータルサイトに発表されるので、必ず指定されたクラスで受講すること。原則としてクラス変更はできない。変更する必要がある場合は、履修相談を必ず受けること。②西洋音楽史Ⅰが必修のコースは、今年度は西洋音楽史の履修を優先すること。③初回の授業には必ず出席すること。④教科書は必ず持参すること。⑤提出物の期限を守ること。⑥西洋音楽文化の背景を理解するために、「西洋文化史Ⅰ」「西洋文化史Ⅱ」の両科目（選択科目）を、可能な限り卒業までのいずれかの段階で履修することを勧める。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業内容についての理解を深めるためには、授業外学修、特に復習が欠かせない。授業外学修として全員必ず行ってほしいのは、以下の２つである。①授業で取り上げた時代や事柄について、教科書や参考書の該当箇所を読むこと。②授業で取り上げた曲を「ナクソス・ミュージック・ライブラリー（NML）」でもう一度聴くこと（いろいろな演奏者で聴いたり、同じ作曲者の別の曲も聴いてみたりするのはなお良い）。特に１年生は、知識を増やすことも大切だが、それ以上に、積極的に沢山の音楽を聴いて「音楽的経験」を増やすことが重要である。図書館のC

教科書・参考書

教科書（購入必須）：坂崎紀著『西洋音楽史』（アカデミア･ミュージック刊）。
参考書（購入は必須ではないが、興味・理解を深めるための助けとなるもの）：①岸本宏子・酒巻和子・小畑恒夫・石川亮子・有田栄著『つながりと流れがよくわかる　西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング刊）、②近藤譲著『ものがたり西洋音楽史 』（岩波ジュニア新書、岩波書店刊）

科目名－クラス名

西洋音楽史特殊講義

曜日時限

火 3時限

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	前期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽を専門的に学ぶ者にとって、西洋音楽史に関する理解は必要不可欠なものであり、とりわけ高度な学びの場である大学院においては、より確実で整理された知識が求められる。本授業では西洋音楽史の流れを、文化的・社会的背景と具体的な作品とともに振り返りながら、それぞれの時代に特徴的な音楽を楽しむと同時に、歴史的に系統立てて把握する力を強化することを目標とする。

学修成果

①音楽が生まれた時代背景と様式の変遷について、明確に理解し説明できるようになる。
②様々な特徴を持つ音楽について、歴史的視点から体系的に考察できるようになる。

授業展開と内容

第1回	導入：西洋音楽史を学ぶ意義とは＆プレイスメント試験（王＆石川クラスを除く）
第2回	中世の社会と音楽
第3回	ルネサンスの社会と音楽
第4回	バロックの社会と音楽①：絶対主義と貴族社会
第5回	バロックの社会と音楽②：オペラの誕生と展開
第6回	バロックの社会と音楽③：コンチェルト、ソナタ
第7回	古典派の社会と音楽①：啓蒙思想とソナタ形式
第8回	古典派の社会と音楽②：交響曲、弦楽四重奏曲、ソナタ
第9回	古典派の社会と音楽③：グルックのオペラ改革とモーツァルト
第10回	ソナタロマン派の社会と音楽①：フランス革命と市民社会
第11回	ロマン派の社会と音楽②：オーケストラ、ピアノ
第12回	ロマン派の社会と音楽③：オペラ、歌曲
第13回	近現代の社会と音楽①：ドビュッシー、ストラヴィンスキーとシェーンベルク
第14回	近現代の社会と音楽②：前衛主義と実験主義
第15回	総括：再び、西洋音楽史を学ぶ意義とは
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

2019年度入学者から、両専攻とも必修科目となるので注意すること。留学生は王＆石川クラスを履修すること。留学生以外の履修者については、第1回の授業内でプレイスメント試験を実施し、結果に従ってクラス指定を行う。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業内で鑑賞できる作品や部分は限られているので、図書館などを活用し、各自で楽譜および音源や映像資料を入手して、積極的に様々な音楽に触れていくこと（60分）。その際、授業の内容をよく復習し、アカデミックに音楽と向き合う態度を心がけて欲しい。

教科書・参考書

教科書：岸本宏子ほか著『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング）。その他、適宜、授業内でプリントを配付するので、各自で管理すること。
参考書：M. カッロッツォほか著『西洋音楽の歴史』全3巻（シーライト・パブリッシング）。その他、授業内でも紹介する。

科目名－クラス名

博士西洋音楽史特講Ⅰ

曜日時限

火 2時限

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	前期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	0	50	50	100

教育到達目標と概要

本講の目標は、歴史的音楽学の立場から、学問的に作品に取り組むための視座を養うことにある。西洋音楽史においてはエポックメイキングな作品、すなわちその時代を特徴づける数多くの重要作品が存在する。それらはいかにして時代固有の精神を映し出しながら、時代を越えた普遍性を持ち得るのか。本講では、オペラと室内楽曲の2つのジャンルについて、時代を代表する作品を比較検証し、ジャンルに共通する特質を明らかにしながら各時代に固有の音楽的観点や研究の手法を身に付ける。

学修成果

西洋音楽史における時代様式とその特徴、およびジャンル固有の問題について理解することができる。またそれらを通して、歴史的音楽学の伝統的かつ正統的な手法を身に付け、自立した学術研究を行うための確固たる素地を養うことができる。

授業展開と内容

第1回	導入：歴史的音楽学とは何か（酒巻・石川）
第2回	バロックのオペラ①（酒巻）
第3回	バロックのオペラ②（酒巻）
第4回	古典派のオペラ（酒巻）
第5回	ロマン派のオペラ（石川）
第6回	近現代のオペラ①（石川）
第7回	近現代のオペラ②（石川）
第8回	オペラの研究手法について（総括とディスカッション）（酒巻・石川）
第9回	ルネサンスの室内楽曲（酒巻）
第10回	バロックの室内楽曲（石川）
第11回	古典派の室内楽曲（酒巻）
第12回	ロマン派の室内楽曲（酒巻）
第13回	近現代の室内楽曲①（石川）
第14回	近現代の室内楽曲②（石川）
第15回	器楽曲（室内楽曲）の研究手法について（総括とディスカッション）（酒巻・石川）
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

受講者は、自らの論文執筆に沿ったジャンルから、ルネサンスと古典派、バロックと近現代など、様式や書法の異なる2つの時代を組み合わせて発表を行う。これら発表およびディスカッションが授業内小テストを兼ねているので、丁寧に準備やプレゼンテーションを行い、積極的かつ論理的な発言を心掛けること。学期末には、

成果発表として授業の内容に基づく口頭試問を行う。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業で対象となった作品について、各自で楽譜や録音を入手し、必ず全体を通して聴いておくこと（60〜120分）。その際には、授業の内容を再考察し、作品と学術的に向き合う態度を身に付けるようにして欲しい。

教科書・参考書

その都度配付、または指示する。

科目名－クラス名

作曲家・作品研究　B

曜日時限

金 4時限

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	1～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	30	40	0	30	0	100

教育到達目標と概要

さまざまなジャンルの音楽作品を広く体験し学ぶことにより、より豊かな音楽的教養を身につけることを目的としています。授業では重要な作曲家をとりあげ、その生涯と時代背景を概観しながら主要な作品の成立事情などを学び、作品の鑑賞を通して感性を磨きます。また学生自身による研究発表の場を設けることによって、プレゼンテーション力やコミュニケーション力など、汎用的能力を養います。

学修成果

西洋音楽史に関連する専門知識を、より具体的に獲得することができます。また専門領域にかかわらず、音楽芸術に関する幅広い教養を深めることができます。さらに自身のプレゼンテーションの経験を通して主体的に学ぶ力が身に付き、コミュニケーション能力を養うことができます。

授業展開と内容

第1回　ヴィヴァルディの「コンチェルト」。バロック時代の合奏様式について。

第2回　J.S.バッハの「管弦楽組曲」。バッハの生涯とバロック時代の主要な楽曲形式について。

第3回　ヘンデルのオペラとオラトリオ。ヘンデルの生涯とバロック時代の声楽様式について。

第4回　モーツァルトの生涯と、さまざまなジャンルの作品。古典派の主要な楽曲形式について。

第5回　ベートーヴェンの生涯と作品。交響曲とピアノ・ソナタからみた時代の転換期について。

第6回　シューベルトの歌曲とピアノ曲。初期ロマン派の特徴について。

第7回　シューマンの生涯と作品。ロマン派の歌曲と器楽曲について。

第8回　ショパンの生涯と作品。ピアノ曲とピアノ協奏曲について。

第9回　ブラームスの生涯と作品。主要なピアノ曲と交響曲について。

第10回　ベルリオーズの管弦楽作品。交響詩について。

第11回　フランクの「ヴァイオリン・ソナタ」。循環形式について。

第12回　リストのピアノ曲とパガニーニ。演奏技巧について。

第13回　ロマン派のイタリア・オペラ。ヴェルディのオペラ作品について。

第14回　ワーグナーのオペラ。楽劇について。

第15回　ロマン派のフランスのオペラ。前期のまとめ

第16回　ドヴォルザークの生涯と作品。交響曲と室内楽について。

第17回　リムスキー=コルサコフの管弦楽曲。ロマン派のオーケストラと管弦楽法について。

第18回　チャイコフスキーの生涯と作品。ヴァイオリン協奏曲とピアノ協奏曲、バレエ音楽について。

第19回　ラフマニノフのピアノ協奏曲。様式の特徴と演奏技巧について。

第20回　後期ロマン派の宗教的声楽作品。フォーレのミサ曲とレクイエムについて。

第21回　後期ロマン派のオペラ作品。プッチーニのオペラについて。

第22回　J.シュトラウスのオペレッタ。オペレッタの楽しみ方について。

第23回　ドビュッシーのピアノ曲と管弦楽曲。新しい時代の響きについて。

第24回　ラヴェルとサティの作品。ジャズとのかかわりや個性的な試みについて。

第25回　ガーシュウィンの作品。ビッグバンドとアメリカ合衆国のオペラ作品について。

第26回　ストラヴィンスキーのバレエ音楽。20世紀の音楽様式の特徴について。

第27回　20世紀の管弦楽と吹奏楽。ホルストの管弦楽曲について。

第28回　日本の声楽曲。日本歌曲と日本のオペラ作品について。

第29回　20世紀のポピュラー音楽概観。さまざまなジャンルの音楽作品について。

第30回　まとめ。

履修上の注意

主体的に授業に取り組み、音楽作品を聴くときは「音」に集中してください。発表に臨む姿勢と発表を聞く態度も重視します。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業で取り上げる作曲家や代表的作品について、予習をしておいてください（約30分）。授業後には、さらなる音楽体験を広げるため、図書館の資料やNAXOSの音源等を活用して多くの作品を聴いてください（約60分）。
また、授業内発表のための配付資料等を計画的にきちんと準備しておくこと。発表に対する学生相互のコメント等をフィードバックしますので、次回の発表に活用してください。

教科書・参考書

特に指定しません。参考文献を紹介し、必要に応じて資料を配付します。

科目名－クラス名

作曲家・作品研究　B

曜日時限

金 4時限

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	30	40	0	30	0	100

教育到達目標と概要

さまざまなジャンルの音楽作品を広く学ぶことにより、より豊かな音楽的教養を身につけることを目的としています。授業では重要な作曲家をとりあげ、その生涯と時代背景の概要を確認しながら、主要な作品についてその特徴などを深く学びます。個々の作品については、学生自身による主体的な調査研究およびその発表の機会を設けて、汎用的能力を養います。

学修成果

西洋音楽史に関連する専門知識を、より具体的に獲得することができます。専門領域にかかわらず、音楽芸術に関する幅広い教養を深めることができます。主体的に学び、その成果を発表しあうことにより、コミュニケーション能力も身に付きます。

授業展開と内容

第1回　ヴィヴァルディの「コンチェルト」。バロック時代の合奏様式について。

第2回　J.S.バッハの「管弦楽組曲」。バッハの生涯とバロック時代の主要な楽曲形式について。

第3回　ヘンデルのオペラとオラトリオ。ヘンデルの生涯とバロック時代の声楽様式について。

第4回　モーツァルトの生涯と、さまざまなジャンルの作品。古典派の主要な楽曲形式について。

第5回　ベートーヴェンの生涯と作品。交響曲とピアノ・ソナタからみた時代の転換期について。

第6回　シューベルトの歌曲とピアノ曲。初期ロマン派の特徴について。

第7回　シューマンの生涯と作品。ロマン派の歌曲と器楽曲について。

第8回　ショパンの生涯と作品。ピアノ曲とピアノ協奏曲について。

第9回　ブラームスの生涯と作品。主要なピアノ曲と交響曲について。

第10回　ベルリオーズの管弦楽作品。交響詩について。

第11回　フランクの「ヴァイオリン・ソナタ」。循環形式について。

第12回　リストのピアノ曲とパガニーニ。演奏技巧について。

第13回　ロマン派のイタリア・オペラ。ヴェルディのオペラ作品について。

第14回　ワーグナーのオペラ。楽劇について。

第15回　ロマン派のフランスのオペラ。前期のまとめ

第16回　ドヴォルザークの生涯と作品。交響曲と室内楽について。

第17回　リムスキー=コルサコフの管弦楽曲。ロマン派のオーケストラと管弦楽法について。

第18回　チャイコフスキーの生涯と作品。ヴァイオリン協奏曲とピアノ協奏曲、バレエ音楽について。

第19回　ラフマニノフのピアノ協奏曲。様式の特徴と演奏技巧について。

第20回　後期ロマン派の宗教的声楽作品。フォーレのミサ曲とレクイエムについて。

第21回　後期ロマン派のオペラ作品。プッチーニのオペラについて。

第22回　J.シュトラウスのオペレッタ。オペレッタの楽しみ方について。

第23回　ドビュッシーのピアノ曲と管弦楽曲。新しい時代の響きについて。

第24回　ラヴェルとサティの作品。ジャズとのかかわりや個性的な試みについて。

第25回　ガーシュウィンの作品。ビッグバンドとアメリカ合衆国のオペラ作品について。

第26回　ストラヴィンスキーのバレエ音楽。20世紀の音楽様式の特徴について。

第27回　20世紀の管弦楽と吹奏楽。ホルストの管弦楽曲について。

第28回　日本の声楽曲。日本歌曲と日本のオペラ作品について。

第29回　20世紀のポピュラー音楽概観。さまざまなジャンルの音楽作品について。

第30回　まとめ。

履修上の注意

主体的に授業に取り組み、音楽作品を聴くときは「音」に集中してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業で取り上げる作曲家や代表的作品について、予習をしておいてください（約30分）。授業後には、さらなる音楽体験を広げるため、図書館の資料やNAXOSの音源等を活用して多くの作品を聴いてください（約60分）。
また、授業内発表のための配付資料等を計画的にきちんと準備しておくこと。発表に対する学生相互のコメント等をフィードバックしますので、次回の発表に活用してください。

教科書・参考書

特に指定しません。参考文献を紹介し、必要に応じて資料を配付します。

科目名－クラス名

音楽評論概説

曜日時限

火 2時限

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	3～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	80	0	20	0	100

教育到達目標と概要

演奏者としてばかりでなく優れた聴き手として音楽作品に触れ、研究し考えたことを言葉で表現することを目的としています。名曲とは何か、優れた演奏、演出とは何か。西洋音楽史の視点をふまえながら、音楽と社会とのかかわりや、時代を超えて生き続ける芸術作品について考えます。授業ではバロック時代の音楽、古典派以降のオペラ、古典派以降の器楽という3つのテーマを設け、3人の教員が分担してそれぞれ作品論や演奏論の基礎を解説し、評論とは何かを学びます。

学修成果

音楽作品について、自分の言葉で語ったり文章で表現したりすることができるようになります。また他者の考え方に対して、深い共感を述べたり、その問題点を自分の言葉で整理することができます。

授業展開と内容

第1回　オペラの基礎知識①：作曲家、作品、演奏家などについて　　前期第1回～第6回、第8回～10回、第12回～第15回　授業担当：小畑

第2回　オペラの基礎知識②：オペラの歴史、慣習、上演史などについて

第3回　レチタティーヴォと歌の話：《コシ・ファン・トゥッテ》

第4回　歌うドラマとしてのオペラ：《ラ・ボエーム》

第5回　合唱とオペラ：ヴェルディとワーグナー

第6回　演劇的なオペラ：《ラ・トラヴィアータ》

第7回　オペラ・ブッファのルーツ：ペルゴレージ《奥様女中》を例に　　授業担当：酒巻

第8回　ベルカント・オペラの聴き方：《ランスへの旅》授業担当：小畑

第9回　イタリアの初期ロマン主義：ベッリーニのオペラ

第10回　さまざまな言葉のオペラ：言葉と音楽の関係

第11回　近代のオペラ　　授業担当：石川

第12回　オペラの演出①：リアリズム演出　授業担当：小畑

第13回　オペラの演出②：読み替え演出（1）時代や場所の変更

第14回　オペラの演出③：読み替え演出（2）レジーテアター

第15回　課題発表と前期のまとめ

第16回　バロック時代のイタリア①　通奏低音つき独唱歌曲とバロックオペラのアリア　第16回～22回授業担当：酒巻

第17回　バロック時代のイタリア②　ヴァイオリン音楽と器楽の興隆

第18回　ルイ王朝時代のフランスの音楽

第19回　J.S.バッハの生涯と作品①　ドイツの宮廷音楽

第20回　J.S.バッハの生涯と作品②　ドイツの教会音楽

第21回　ヘンデルの生涯と作品　バロック時代の器楽とオペラまとめ

第22回　現代におけるバロック音楽

第23回　器楽を「鑑賞する」とは？　後期第23回～第30回授業担当：石川

第24回　器楽における形式：ソナタ形式

第25回　ベートーヴェンのピアノ・ソナタ①　楽曲として

第26回　ベートーヴェンのピアノ・ソナタ②　演奏解釈として

第27回　器楽における演奏形態：オーケストラ

第28回　ベートーヴェンの交響曲①　楽曲として

第29回　ベートーヴェンの交響曲②　演奏解釈として

第30回　1年間の総括　評論文の執筆作成

履修上の注意

授業では積極的な発言が求められます。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業で扱う作曲家や作品について、基本的な知識を獲得するために予習をしておいてください（約60分）。復習として、授業で扱った作品を、図書館や実際の演奏会等で聴いておくこと（約60分）。その他の課題およびフィードバックの方法については、授業内で説明します。

教科書・参考書

特に指定しません。参考文献については授業内で紹介します。

科目名－クラス名

音楽評論概説

曜日時限

火 2時限

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	80	0	20	0	100

教育到達目標と概要

演奏者としてばかりでなく優れた聴き手として音楽作品に触れ、研究し考えたことを言葉で表現することを目的としています。名曲とは何か、優れた演奏、演出とは何か。西洋音楽史の視点をふまえながら、音楽と社会とのかかわりや、時代を超えて生き続ける芸術作品について考えます。授業ではバロック時代の音楽、古典派以降のオペラ、古典派以降の器楽という3つのテーマを設け、3人の教員が分担してそれぞれ作品論や演奏論の基礎を解説し、評論とは何かを学びます。

学修成果

音楽作品について、自分の言葉で語ったり文章で表現したりすることができるようになります。また他者の考え方に対して、深い共感を述べたり、その問題点を自分の言葉で整理することができます。

授業展開と内容

第1回　オペラの基礎知識①：作曲家、作品、演奏家などについて　　前期第1回～第6回、第8回～10回、第12回～第15回　授業担当：小畑

第2回　オペラの基礎知識②：オペラの歴史、慣習、上演史などについて

第3回　レチタティーヴォと歌の話：《コシ・ファン・トゥッテ》

第4回　歌うドラマとしてのオペラ：《ラ・ボエーム》

第5回　合唱とオペラ：ヴェルディとワーグナー

第6回　演劇的なオペラ：《ラ・トラヴィアータ》

第7回　オペラ・ブッファのルーツ：ペルゴレージ《奥様女中》を例に　　授業担当：酒巻

第8回　ベルカント・オペラの聴き方：《ランスへの旅》授業担当：小畑

第9回　イタリアの初期ロマン主義：ベッリーニのオペラ

第10回　さまざまな言葉のオペラ：言葉と音楽の関係

第11回　近代のオペラ　　授業担当：石川

第12回　オペラの演出①：リアリズム演出　授業担当：小畑

第13回　オペラの演出②：読み替え演出（1）時代や場所の変更

第14回　オペラの演出③：読み替え演出（2）レジーテアター

第15回　課題発表と前期のまとめ

第16回　バロック時代のイタリア①　通奏低音つき独唱歌曲とバロックオペラのアリア　第16回～22回授業担当：酒巻

第17回　バロック時代のイタリア②　ヴァイオリン音楽と器楽の興隆

第18回　ルイ王朝時代のフランスの音楽

第19回　J.S.バッハの生涯と作品①　ドイツの宮廷音楽

第20回　J.S.バッハの生涯と作品②　ドイツの教会音楽

第21回　ヘンデルの生涯と作品　バロック時代の器楽とオペラまとめ

第22回　現代におけるバロック音楽

第23回　器楽を「鑑賞する」とは？　後期第23回～第30回授業担当：石川

第24回　器楽における形式：ソナタ形式

第25回　ベートーヴェンのピアノ・ソナタ①　楽曲として

第26回　ベートーヴェンのピアノ・ソナタ②　演奏解釈として

第27回　器楽における演奏形態：オーケストラ

第28回　ベートーヴェンの交響曲①　楽曲として

第29回　ベートーヴェンの交響曲②　演奏解釈として

第30回　1年間の総括　評論文の執筆作成

履修上の注意

授業では積極的な発言が求められます。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業で扱う作曲家や作品について、基本的な知識を獲得するために予習をしておいてください（約60分）。復習として、授業で扱った作品を、図書館や実際の演奏会等で聴いておくこと（約60分）。その他の課題およびフィードバックの方法については、授業内で説明します。

教科書・参考書

特に指定しません。参考文献については授業内で紹介します。

科目名－クラス名

課題研究Ⅰ

曜日時限

木 2時限

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士論文（20,000～30,000字程度）を執筆する。
◆修士論文では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいて、先行研究を正しく評価・参照しながら、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により学術的な議論を深め、展開していくことが求められる。したがって、それに耐えうるテーマ・題材を設定することが必要である。
◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、学術論文の基本的な書き方、および論文作成に必要なリサーチ・スキルを修得するこ

学修成果

論文執筆の過程を通じて、学術論文の執筆に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
論文執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定①　修士論文題目の提出に向けた指導

第2回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定②　修士論文執筆計画書の提出に向けた指導

第3回　論文執筆の予備的作業①　文献表の完成と基礎知識の整理

第4回　論文執筆の予備的作業②　文献・資料の選定

第5回　論文執筆の予備的作業③　論文の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査の要・不要の確認
★「履修上の注意」を参照のこと

第6回　論文執筆①　序論の書き方

第7回　論文執筆②　序論の執筆

第8回　（以下、３章立ての論文を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。４章立ての場合もこれに準じて計画する）
論文執筆③　第１章のための文献を読む

第9回　論文執筆④　第１章の執筆

第10回　論文執筆⑤　第１章の推敲

第11回　論文執筆⑥　第２章のための文献を読む

第12回　論文執筆⑦　第２章の執筆

第13回　論文執筆⑧　第２章の推敲

第14回　中間発表の準備①　中間発表にむけて、発表原稿作成

第15回　１．中間発表の準備②　中間発表のハンドアウト作成、プレゼンテーションの練習２．夏休み中の作業計画確認
★修士論文中間レポートを指導担当の教員に提出（字数自由。期日・様式は各担当教員の指示に従うこと）

第16回　中間発表のレビュー／執筆進捗状況の報告／後期の執筆計画の確認

第17回　論文執筆⑨　第３章のための文献や資料を整理する

第18回　論文執筆⑩　第３章の執筆

第19回　論文執筆⑪　第３章の推敲

第20回　論文執筆⑫　その他の部分の執筆と推敲

第21回　論文執筆⑬　結論の書き方

第22回　論文執筆⑭　結論の執筆と推敲

第23回　論文執筆⑮　序論と結論、および全体の論旨の確認と見直し

第24回　論文執筆⑯　参考文献表を整える

第25回　論文執筆⑰　書式を整える（注の書式、参考文献表の書式、譜例や図版のキャプション等の確認）

第26回　論文執筆⑱　体裁を整える（本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）

第27回　論文執筆⑲　論文要旨を執筆する

第28回　提出前の最終確認　論文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

第29回	口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　口頭試問で指摘を受けた事項の確認、および誤字脱字・書式の確認
第30回	口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　本文と要旨およびその他提出物の再確認

履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士論文を執筆する年度当初に「修士論文執筆計画書」の提出、「修士論文題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆論文の執筆に当たっては研究倫理に留意し

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「研究倫理ガイダンス」への参加
③口頭試問で指摘を受けた事項の修正・確認（試問終了後、担

教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文

科目名－クラス名

課題研究Ⅱ

曜日時限

木 2時限

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	前期	1

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士研究（8,000～12,000字程度）を執筆する。
◆修士研究（Ⅱ）では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識などに基づいて、文献や資料を読み込み、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により議論を展開し、それを一貫した論旨を持つ文章にまとめることが求められる。実技研究と密接に結びついたテーマや、将来さらに発展的な研究につながる予備的研究などが適している。
◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、論文に準ずる学術的な文章の基本的

学修成果

執筆の過程を通じて、学術的な研究に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	執筆計画の策定と研究タイトルの決定①　修士研究題目の提出に向けた指導
第2回	執筆計画の策定と研究タイトルの決定②　修士研究執筆計画書の提出に向けた指導
第3回	執筆の予備的作業①　文献表の作成と基礎知識の整理
第4回	執筆の予備的作業③　研究の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査（「履修上の注意」を参照）の要・不要の確認
第5回	執筆①　序の書き方・序の執筆
第6回	（以下、３章立ての研究を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。他の構成の場合もこれに準じて計画する） 執筆②　第１章のための予備的調査
第7回	執筆③　第１章の執筆・推敲
第8回	執筆④　第２章のための予備的調査執筆⑤　第２章の執筆・推敲
第9回	執筆⑥　第３章のための予備的調査
第10回	執筆⑦　第３章の執筆・推敲
第11回	執筆⑧　結論の執筆と推敲、および全体の論旨の確認と見直し
第12回	執筆⑨　参考文献表を整える
第13回	執筆⑩　書式と体裁を整える（注や参考文献表の書式、譜例や図版、本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）
第14回	執筆⑪　要旨を執筆する
第15回	提出前の最終確認　本文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認 ★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士研究を執筆する年度当初に「修士研究執筆計画書」の提出、「修士研究題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆研究の執筆に当たっては研究倫理に留意

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「図書館ガイダンス」への参加
③「研究倫理ガイダンス」への参加
④口頭試問で指摘を受け

教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文・レポートの執筆から文献表記法まで』（改訂新版）春秋社刊

科目名－クラス名

卒業研究

曜日時限

他

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
その他	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

音楽と社会コースの必修科目です。在学中に学んだ成果を発表するために、実技演奏または論文執筆のいずれかを選択し、指導教員のもとで研究を行います。実技演奏で研究発表をする場合は、前期のうちに個人レッスンの指導教員と相談の上で研究テーマを設定し、後期には研究発表会に向けて、必要な実技指導を受けます。研究発表会に際して研究報告レポートとしてプログラム・ノートを作成することとし、これについては酒巻が担当します。論文を執筆する場合は、テーマの設定から執筆完了まで酒巻が担当します。論文についても研究発表会でプレゼンテー

学修成果

設定した研究課題に取り組むことによって、専門知識を深めることができます。演奏実技の成果発表を通じて、演奏表現によるプレゼンテーション能力を高め、プログラム・ノートの作成によって文章力を身につけることができます。論文執筆の成果発表を通じて、自らの考えや新しい発見を言葉で表現し、論理的に構成された文章をまとめる能力を高め、それを言葉でも表現し伝える力を身につけることができるようになります。

授業展開と内容

第1回　ガイダンス

第2回　研究テーマの探索①　研究の概要

第3回　研究テーマの探索②　基本的な資料調査

第4回　研究テーマの検討①　テーマの周辺に関する資料調査

第5回　研究テーマの検討②　テーマに関する資料調査と具体的な資料の活用

第6回　研究テーマの検討③　テーマの確認と修正。実技の場合は、実技指導教員とレポート担当教員との連携による。

第7回　研究テーマの検討④　修正後のテーマの確認。実技の場合は、実技指導教員とレポート担当教員との連携による。

第8回　研究テーマの決定。実技の場合は、実技指導教員とレポート担当教員との連携による。

第9回　研究の準備①　文献、楽譜等資料の整理

第10回　研究の準備②　資料のまとめ

第11回　研究の準備③　研究計画の作成

第12回　論文または演奏プログラムの検討①　論文の構成または演奏作品の選択

第13回　論文または演奏プログラムの検討②　論文の構成または演奏作品の修正

第14回　論文または演奏プログラムの検討③　論文の構成または演奏作品の決定

第15回　前期のまとめと執筆計画の確認

第16回　研究計画の確認

第17回　論文またはレポート執筆の準備　研究の目的と課題の確認

第18回　論文またはレポート執筆①　研究計画にしたがった論文またはレポート執筆指導、実技については、指導教員による実技個別指導

第19回　論文またはレポート執筆②　研究計画にしたがった執筆指導、実技個別指導

第20回　論文またはレポート執筆③　研究計画にしたがった執筆指導の継続、実技個別指導

第21回　論文またはレポート執筆④　研究計画にしたがった執筆指導の継続と修正、実技個別指導

第22回　論文またはレポート執筆⑤　結論の作成、実技個別指導

第23回　論文またはレポート執筆⑥　まとめの準備、実技個別指導

第24回　演論文またはレポート執筆⑦　全体のまとめ、実技個別指導

第25回　演論文またはレポート執筆⑧　論文の執筆完了、プログラムノートの執筆完了、実技個別指導

第26回　成果発表に係る提出物の準備　論文レジュメ、レポートのプリントアウト等

第27回　卒業研究発表会の準備①　指導教員による合同指導

第28回　卒業研究発表会の準備②　指導教員による合同指導

第29回　卒業研究発表会の準備③　リハーサル

第30回　卒業研究発表会　（12月下旬を予定。日程は別途連絡します）

履修上の注意

学修の成果により評価します。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

成果発表までの研究計画および執筆計画を確認しながら、着実に課題をこなすこと。

教科書・参考書

研究テーマに応じた適切な参考文献や参考資料について、検索方法および入手方法等を個別に指示します。

科目名－クラス名

芸特応用研究Ⅰ

曜日時限

他

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
その他	1～	通年	1

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	80	0	20	0	100

教育到達目標と概要

音楽をはじめ様々な優れた芸術を鑑賞することにより、芸術に対する興味や知識を深め、感性を磨くことを目標とします。演目については、学内における特別講座等を含み、任意に選択した一般芸術公演や、社会人を対象とした公開講座、幅広いジャンルでの美術展等を対象とします。

学修成果

優れた演奏や美術作品等の鑑賞により、他ジャンルや多様な文化への知識や理解が深まり、視野を広げることができます。鑑賞後にレポートを作成し、さらに成果発表をすることにより、自分の考えをまとめ、他人に伝えることができるようになります。生涯にわたる様々な学修能力を形成することができます。

授業展開と内容

第1回　ガイダンス。科目の特徴、課題、成果発表について。年間計画について。

第2回　演奏会・美術展等の情報を得る。

第3回　情報交換会① 年間計画について、履修者間で情報交換を行う。

第4回　演目（その１）について、下調べをする。

第5回　演目（その１）について、事前学修をする。

第6回　演目（その１）を聴講・鑑賞する。

第7回　演目（その１）について、記録する。

第8回　演目（その２）について、下調べをする。

第9回　演目（その２）について、事前学修をする。

第10回　演目（その２）を聴講・鑑賞する。

第11回　演目（その２）について、記録する。

第12回　担当教員による授業「生涯学修と芸術」をテーマとした研究会（１）（日程等未定。調整の上、後日連絡します）

第13回　前期報告会の準備をする。前期の成果について、各自記録をまとめる。

第14回　夏休み及び後期の計画について、履修者間で情報交換を行う。

第15回　前期報告会。各自の成果報告と意見交換、情報交換。

第16回　後期の計画を立てる。

第17回　演奏会・美術展等の情報を得る。

第18回　演目(その３)について、下調べをする。

第19回　演目(その３)について、事前学修をする。

第20回　演目(その３)を聴講・鑑賞する。

第21回　演目(その３)について、記録する。

第22回　演目（その４)について、下調べをする。

第23回　演目（その４)について、事前学修をする。

第24回　演目（その４)を聴講・鑑賞する。

第25回　演目（その４)について、記録する。

第26回　後期の成果について、各自記録をまとめる。

第27回　担当教員による授業「生涯学修と芸術」をテーマとした研究会（２）（日程等未定。調整の上、後日連絡します）

第28回　追加演目（その５～）があれば、すべて含めて、年間の記録を整理する。

第29回　後期報告会の準備をする。

第30回　後期報告会。各自の成果報告と意見交換。一年のまとめ。

履修上の注意

履修者は各自で鑑賞記録をつけておくこと。チケットの半券やチラシ等は整理して保存しておくこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

音楽公演や美術展などの情報を整理し、日程を確認しておくこと。実際に音楽公演や美術展を鑑賞する前に、演奏曲目や美術展の内容を調べておくこと。以上を、日常的に行うことができるような習慣を身につけること。
報告会には、鑑賞した演目の一覧を配付できるように準備し、鑑賞した演目の中から発表するものを選び、きちんと準備をして臨むこと。

教科書・参考書

特に指定しません。必要に応じて参考文献を紹介します。

科目名－クラス名

芸特応用研究Ⅱ

曜日時限

他

担当教員

酒巻　和子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
その他	2～	通年	1

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	80	0	20	0	100

教育到達目標と概要

音楽をはじめ様々な優れた芸術を鑑賞することにより、「芸特応用研究Ⅰ」に続き、さらに芸術に対する興味や知識を深め、感性を高めることを目標とします。演目については、学内における特別講座等を含み、任意に選択した一般芸術公演や、社会人を対象とした公開講座、幅広いジャンルでの美術展等を対象とします。

学修成果

優れた演奏や美術作品等の鑑賞により、他ジャンルや多様な文化への知識や理解が深まり、視野を広げることができます。鑑賞後にレポートを作成し、さらに成果発表をすることにより、自分の考えをまとめ、他人に伝えることができるようになります。生涯にわたる様々な学修能力を形成することができます。

授業展開と内容

第1回　ガイダンス。科目の特徴、課題、成果発表について。年間計画について。

第2回　演奏会・美術展等の情報を得る。

第3回　情報交換会① 年間計画について、履修者間で情報交換を行う。

第4回　演目（その１）について、下調べをする。

第5回　演目（その１）について、事前学修をする。

第6回　演目（その１）を聴講・鑑賞する。

第7回　演目（その１）について、記録する。

第8回　演目（その２）について、下調べをする。

第9回　演目（その２）について、事前学修をする。

第10回　演目（その２）を聴講・鑑賞する。

第11回　演目（その２）について、記録する。

第12回　担当教員による授業「生涯学修と芸術」をテーマとした研究会（１）（日程等未定。調整の上、後日連絡します）

第13回　前期報告会の準備をする。前期の成果について、各自記録をまとめる。

第14回　夏休み及び後期の計画について、履修者間で情報交換を行う。

第15回　前期報告会。各自の成果報告と意見交換、情報交換。

第16回　後期の計画を立てる。

第17回　演奏会・美術展等の情報を得る。

第18回　演目(その３)について、下調べをする。

第19回　演目(その３)について、事前学修をする。

第20回　演目(その３)を聴講・鑑賞する。

第21回　演目(その３)について、記録する。

第22回　演目（その４)について、下調べをする。

第23回　演目（その４)について、事前学修をする。

第24回　演目（その４)を聴講・鑑賞する。

第25回　演目（その４)について、記録する。

第26回　後期の成果について、各自記録をまとめる。

第27回　担当教員による授業「生涯学修と芸術」をテーマとした研究会（２）（日程等未定。調整の上、後日連絡します）

第28回　追加演目（その５～）があれば、すべて含めて、年間の記録を整理する。

第29回　後期報告会の準備をする。

第30回　後期報告会。各自の成果報告と意見交換。一年のまとめ。

履修上の注意

履修者は各自で鑑賞記録をつけておくこと。チケットの半券やチラシ等は整理して保存しておくこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

音楽公演や美術展などの情報を整理し、日程を確認しておくこと。実際に音楽公演や美術展を鑑賞する前に、演奏曲目や美術展の内容を調べておくこと。以上を、日常的に行うことができるような習慣を身につけること。
報告会には、鑑賞した演目の一覧を配付できるように準備し、鑑賞した演目の中から発表するものを選び、きちんと準備をして臨むこと。

教科書・参考書

特に指定しません。必要に応じて参考文献を紹介します。

2022年度(前期)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：0081　教員名：酒巻 和子

１）評価結果に対する所見

2022年度前期に担当した科目は、大学院修士課程１年次必修の「西洋音楽史特殊講義」である。プレイスメントテストによって分けられた３クラスのうち上級クラスを担当したため、学生たちは西洋音楽史についての基礎知識はすでに獲得し、学修に対する姿勢も十分に身についていた。全クラス共通に設定されたシラバスに沿いながら、各回とも少しずつ内容を深めて履修生の意欲を維持できるように配慮したつもりである。高い満足度を確認することができたことを素直に嬉しく思っている。

２）要望への対応・改善方策

一方的な講義だけの授業にならないよう、学生が自身で設定したテーマについて西洋音楽史の観点からまとめ、クラス内で配付する課題を取り入れた。前年には資料をもとに口頭での発表を加えた課題としたため、毎回予定以上に時間がかかってしまったことを反省し改善したものである。今年度は学生の説明は最小限にとどめ、作品の視聴についても視聴覚資料の紹介と要点の鑑賞のみとした。履修生の専門分野が多様で、時代およびジャンルの点からもさまざまな作曲家や作品がとりあげられることになり、学生どうしの情報交換など交流も生まれたようである。「皆さんのレポート発表からも新たな学びを得ることが出来てとても勉強になりました」というコメントが何より励みになった。

３）今後の課題

授業内でのレポート発表を継続させようと考えている。１年次の必修科目であるため、入学時に想定していた自身の研究テーマを具体化させるステップになればよいと思う。修士論文、修士研究につながる機会として活用できる科目になれば、学修の動機付けにもなると思われる。文献や視聴覚資料の検索やレポートのまとめ方についてもしっかり指導していきたい。

以　上

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：0081　教員名：酒巻 和子

１）評価結果に対する所見

個人で担当した通年科目「西洋音楽史Ⅰ」（短大Aクラス)、「作曲家・作品研究」（学・短Bクラス)、「卒業研究」（音楽と社会）について確認した。Q10総合満足度は、それぞれ3.53 (100%)、3.75(100%)、4.00(100%)であった。満足度が3科目とも100%だったのは初めてだったが、科目ごとに各項目の数値には差が見られた。

「西洋音楽史Ⅰ」ではQ8予習・復習の取り組みが低かった。定期的に課題を出しているが、日常的に授業外学修をする学生は多くないようである。「作曲家・作品研究」が例年高い満足度を獲得できているのは、授業内発表を取り入れているため、学生が主体的に授業にかかわっていることが大きな理由と思われる。「他の学生の発表を聞くことも興味深い」「楽しい」「知識が広がった」という記述もある。

「卒業研究」では、成果発表会を2022年度に初めてユリホールで開催した。「コースの締めくくりである研究発表に向けて、計画的に準備や練習、学修を進めることができた」「丁寧な指導をしてもらえてよかった」「持てる力を出し切れた」などプラスの記述があったほか、「もっと多くの人に聴いてもらいたかった」と残念に感じた学生もいた。一方で「精神的な負担の大きい授業だった」というものがあり、公開の発表会を負担に思う学生もいることに考えさせられた。

２）要望への対応・改善方策

「西洋音楽史Ⅰ」では「勉強になることが多いので真剣に聴いている」という記述にある通り、一般的に学生は熱心に授業に参加している。熱心さのあまり「個人的な質問を授業中にする人がいる」という指摘については、現在実施している「コメント用紙」（学生が質問や理解したことを書いて毎時間提出する）を活用し、質問には次回冒頭に全体で共有できる内容として回答し、復習を兼ねるようにしたい。「作曲家・作品研究」では「グループ討論などを取り入れては」、という提案があった。たしかに授業への積極的な参加という観点からはよい方法といえるもので、もう1クラスの担当教員と共有して検討したい。

３）今後の課題

学生の自己評価ともいえる「予習・復習」の数値は、なかなか高くならないものであるが、学修の習慣について根気よく指導し、少しでも改善させることが課題である。「卒業研究」については、2023年度から複数教員体制で行っている。これまで同様、実技担当教員を含め、教員間の連携を大切にしながら、個々の学生に適切に対応したいと思う。

以　上

2022 年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

「芸特応用研究Ⅰ」担当教員
教員コード：0081　教員名：酒巻　和子

１）評価結果に対する所見

「芸特応用研究Ⅰ」は、「芸特応用研究Ⅱ」とともに短大の音楽と社会コースの必修科目で、教養科目として位置付けられている。長期履修学生もいるため、履修者数は年度によってさまざまであり、2022 年度は 6 名であった。

Q10 総合満足度 3.60(80%) をはじめ、各設問項目で、1 名だけがマイナス評価をつけていたことがわかる。ただ、自由記述にはプラスのコメントのみが書かれた。レポート提出のみでなく、前期・後期には成果発表会としてプレゼンテーションを実施しており、それについてはおおむね好評と思われる。コロナは収束しつつあったが、演奏会や各種の展覧会に以前のように足を運ぶには、シニアの学生にはまだ不安が残っていたかもしれない。成果発表会でそれぞれの取り組みを共有できたことについて、「楽しかった」という表現が肯定的な評価を示していると思いたい。また、自主的な鑑賞のみでなく担当教員の講座を取り入れたことに対しては「先生方をお呼びしてお話を伺ったり、演奏を聴かせていただいたりするのは有意義だった」ととらえられている。

２）要望への対応・改善方策

2022 年度中に「芸術特別研究Ⅰ・Ⅱ」が大幅な見直しを図ったことから、音楽と社会コース独自の科目「芸特応用研究Ⅰ・Ⅱ」についても分科会でそのあり方を検討した。2023 年度には、科目名は現状維持としながら内容の一部を見直し、これまで分科会に寄せられていた学生の要望に応じて柔軟に変更している。自主的なアンサンブルの機会を提供し、成果発表として、これまでの各種芸術鑑賞の口頭発表に加えて、アンサンブルによる演奏も成果発表として認めることにしたのである。

３）今後の課題

一部の学生に高い要望のあったアンサンブルについて、今後、この科目で継続できるかどうか、さまざまな課題は残っている。分科会で検討を継続する予定である。

以　上

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：0081　教員名：酒巻　和子

「音楽評論概説」担当教員
1032 小畑 恒夫、1863 石川 亮子、0081 酒巻 和子

１）評価結果に対する所見

「音楽評論概説」は、短大の音楽と社会コース１年次の必修科目、学部では音楽教養コース３年次からの選択科目として開講されている。授業は３名の教員が担当している（小畑 13 回、酒巻 8 回、石川 9 回)。2022 年度の履修者は、短大 7 名、学部 8 名とほぼ半数ずつであった。

評価結果を見ると、Q10 の総合満足度については 4 段階の 3 と 4 で 100%であった。ただし数値で見ると、科目としては 3.70 であるものの、短大は 3.86 という高い評価を得ることができたが、学部では 3.33 と、かなりの差がついた。この傾向は Q4・Q5（出席状況・興味・関心）等でも同様である。また Q8（予習・復習）については全体に低く、自由記述でも「もっと復習をするべきだった」というものもあった。

その他の記述には「音楽のさまざまな見方、聴き方を学べた」「深く学ぶことができた」など前向きのコメントがあり、励みになった。授業では「考えたことを言葉で表現する」ためにディスカッションも積極的に取り入れているが、これについて大人の学生の発言を私語ととらえる学生がいたことがわかった。また、授業の趣旨は作品論や演奏論の基礎を解説するものであるが、「評論」という言葉に何か特別難しい印象を受けて自信をもてないような学生の記述もあった。しかしその続きには「その音楽そのものや時代性を知ることで、音楽をより理解したり、自分の好みを言葉で説明できるようになるかもしれない、と少し希望をもつ」と書かれており、まさに趣旨が伝わったのではないかと考えている。

２）要望への対応・改善方策

自由な討論と私語は異なるものなので、ディスカッションの進め方を工夫する。授業外学修についてはシラバスに明記しているが、確実に実践されていることを確認しながら、必要に応じて具体的な課題を提供する。

３）今後の課題

年代も音楽経験も西洋音楽史その他の知識もさまざまな学生が一緒に履修していることを改めて認識し、どこかに不満が生じないように注意したい。科目の趣旨をよく伝えることが課題でもある。

以　上